

岡崎義恵著作集 2

日本文芸の様式と展開

宝文館刊行

昭和三十七年十二月十五日 第一刷発行

日本文芸の様式と展開

定 価 1300 円

著 者 岡 崎 義 恵

発行者 宝文館出版株式会社

(代) 伊崎治三郎

印刷者 前 野 信 通

東京都新宿区東大久保二ノ七八

発行所 宝文館出版株式会社

東京都千代田区神田神保町三ノ一七

振替東京二八〇番

印刷・中教印刷
製本・大光堂製本

序

本書に収録した論文は、日本文芸を総括的に取扱ったもので、いわゆる「国文学概論」とか、「日本文学概説」とか、または「日本文学史総説」とかいう名で、これまで行われていたものを、新しく文芸学的見地から考え直したものである。それ故、ここには私なりの体系を示しているといってもよいであろう。

この第一部・第二部の本論は、かつて私の初期の主著の中心部をなしたもので、割合好評でもあったし、また、多少自信がないわけでもない。私はこれらの論文を収載してある、岩波書店刊行の「日本文芸学」「日本文芸の様式」が、今後重版されるようであれば、ここにこれを再録する気にはなれなかったであろう。ところが岩波書店にはその意志がないらしいということが察せられるので、今後は絶版になるであろうと予想し、再びここにこれらの論文を世に問うことにしたのである。

今度これを本書に収めるに当って、多少漢文調であった文脈を和らげ、表記法を現代化し、不正確な記述をいくらか改めた。しかし、私はこれらの論文がその初出形態の若々しさと、高らかな響きとを失うことを惜しみ、なるべく原形を留めるように努めた。もし詩歌などであれば、全く原形のまま

である方がよいということは、「有明集」や「赤光」の例によって明らかであるが、学術論文であるから、いくら幼稚な初期の行文を、そのまま守り続ける必要もないように思う。しかし、読者の中には、やはり私の論文の中に含まれる詩的発想に愛着を持ち、原形を惜しむ情を抱かれる向きもあるかと思うが、本著作集全体の統一のために、あえてこのような加筆を施すことにしたのである。

実はこれらの旧稿は、すべて今一度書き直すのが最もよいであろう。しかし、それは非常に困難であり、また全く別種の論文を書くことになるかも知れない。私は余生をそのような仕事に費す希望もないではないが、ともかく今度はこれくらいに止めた。そして、かねて多くの人から望まれていた註記的補説を、最後の章に書き加えることにしたのである。

この補記はかねて計画していたことであって、当初は本文にも匹敵するくらいの綿密なものをと考えていたが、いよいよ執筆となると、実に厄介なことで、むしろ全部書き改めたくもなるし、引用の作品を一々原典によって示すなどということも、実に煩わしいことであると感じた。それに紙数のかさむことをも顧慮して、この程度に止めたのである。思うに、「幽玄」とか、「あはれ」とか、「いき」とかいふことでも、自分で満足するくらいの補説を加えることになれば、やはり別の著書を数冊も書くことになりかねないであろう。これも余生に負わせる仕事であるかも知れない。

本書ははじめ、この第一部・第二部によって構成する予定であったが、本著作集Ⅰ「日本文芸学新

論」に「文芸史の課題」という総題の下に収める予定であった諸稿が、紙数の関係で載せ切れなくなったので、中途から本巻に収めることに変更した。ところが、この巻でもまた、それを収めると紙数が多くなり過ぎるので、これはその後起稿した数編の論文と共に、後日単行本として刊行することにした。それは今日のところ、次のようなものがある。

史的文芸学の課題

世界文芸史と日本文芸史

文芸史の時代区分

中世文芸理念の誕生

日本におけるルネッサンス

中世から近世へ

近世の文芸史的位相

日本文芸における近代性

この種のもものは今後も書く機会が少なくないと予想されるので、多分「史的文芸学の考察」というような題名の下に、一書を成すことになりそうである。

本書にはこれらの論文を除いた代りに、「余論」として「日本古典と海外の文芸」という一編を、巻末に収録することにした。本論の方では日本文芸と外国文芸との関係に触れた部分が少ないので、

その一端をこれによって補い得たかと思っている。

前にもいったように、本書の第一部と第二部はいわば私の出世作ともいうべきもので、私の学問的位置はこれによって定まったと見る人も多いであろう。これは私としては永く留めて置きたいと思うものであり、また学界にもそれを希望する人はあると思われる。何よりも、これらは私の少壮の筆に成るもので、未熟なところも多い代りに、今日では書けないような気魄が籠っているようである。本著作集はもともと単行本の自著に出ている論文は、なるべく採録しないという趣旨で編集したのであるが、本巻だけは全く旧著の精髓を採って、再びこれを世に問うという意味を持つことになった。そして本巻をもって、この著作集の業を終ることにもなったのである。とにかく、私はここに再び若い頃の思索探求のあとを顧み、いささかの自負と数多い羞恥の中に、この序文を草することになった。

この著作集は、初めは隔月に一卷を出すというようなことも考えていたが、のびのびになって三年半の歳月を費した。私は老後の仕事として、なるべくゆっくり出す方が楽であったが、読者には迷惑をかけたかも知れない。しかし、このような自分自身の記念事業のようなものにも、いくらかの読者のあったことは、何といっても感謝すべきことであり、これを完成してくれた出版元にも同様の念を抱くものである。

昭和三十七年十月

岡 崎 義 恵

日本文芸の様式と展開

目次

序

第一部 日本文芸の様式

第一章 文芸の日本的様式……………三

一 形成の渾融性……………三

1 非構築的渾融……………三

2 歴史物語と作り物語……………三

3 小説と戯曲……………六

4 日記・紀行・随筆……………三

5 長歌……………六

6	連歌と俳諧	三〇
---	-------	----

7	短歌と発句	三三
---	-------	----

二	表現の融和性	五
---	--------	---

1	物心の融和	五
---	-------	---

2	正述心緒	五
---	------	---

3	譬喩・象徴	五
---	-------	---

4	寄物陳思	六
---	------	---

5	詠物	七
---	----	---

三	世界観の情調性	五
---	---------	---

1	情調的美の様相	五
---	---------	---

2	「あはれ」とその知性化	九
---	-------------	---

3	「あはれ」の意志化	一〇
---	-----------	----

4	「をかし」とその周囲	一一
---	------------	----

5	「あはれ」と「をかし」との融合	一二
---	-----------------	----

第二章 日本文芸の外在的諸様式……………三

一 個人様式……………三

- 1 和歌における個人様式説……………三
- 2 俳諧における個人様式説……………一五
- 3 物語・小説における個人様式説……………一五
- 4 個人様式の対立と系列……………一六

二 流派様式と地方様式……………一六

- 1 和歌における流派様式……………一六
- 2 俳諧における流派様式……………二〇
- 3 近世の小説・戯曲における流派……………二〇
- 4 現代における流派……………二一
- 5 地方様式（地域的様式・風土的様式）……………二八

三 時代様式……………三五

1	時代様式の本質	三五
2	時代様式の研究	三三
3	時代様式の展開	二四〇

第三章	補説	二四九
-----	----	-----

第二部 日本文芸の展開

第一章	原始時代	二七三
第二章	古典時代	二九二
第三章	中世	三三一
第四章	近世	三三〇
第五章	現代	三五三
第六章	補説	三七七

余論 日本古典と海外の文芸……………三九七

本書収載論文……………四三

第一部 日本文芸の様式

(補説1参照)

第一章 文芸の日本の様式

一 形成の渾融性

1 非構造的渾融

日本文芸は、これを様式論的見地から見る時は、文芸の日本の様式であるといえることができる。この日本の様式というものは、他の国民的様式に比較してどのような特徴を持つものであるか。これによって指示されることができれば、日本文芸というものは、或る美的様相を意味するところの徴標知されることになるであろう。

日本文芸というものは、これをその背景となり、地盤となるところの、日本国の構成要素から見てゆくことができる。日本の各時代、日本の各地方、日本の各作家というようなものの在り方から、そ

の時代、その地方、その作家の文芸の様式というものが成立し、それらが相連関して一つの日本文芸様式というものを形成しているという風に考えることもできる。これは、いわば日本文芸様式を外在的方面から見たものである。それで、これについては第二章において、「外在的諸様式」の名目の下に考察を加えようと思う。今ここに取扱うのは、いわば日本文芸様式の内在的な一面である。日本文芸がその内部にどのような独自性を含むかという問題である。

そうしてこの日本文芸の内在的な様式徴標を求めるといことは、日本文芸の全作品に亘って、綿密厳正な観察を施し、他国の文芸との比較を試みつつ、日本的特色を示す点を摘出しなければならないのであって、それは長年月の労作と、鋭利な洞察力とを俟たなければならないことである。私はむしろ、このような研究を生涯の仕事としているものであるから、進んでこのことに当らなければならないのであるが、それだけにまた、一生を費して辛うじて或る程度の成功を見ることができれば幸と考えているくらいのもので、今日のところ、完全な研究の成果を発表するというようなことは、到底不可能のことに属するのである。

特に日本的なものと東洋的なものとの関連は、今日私の最も重大視するところであるから、これを厳密に考えることになる、少なくとも中国及びインドの文芸との十分な比較研究を施した結果、言を立てるべきものである。ところが、中国文芸との比較は困難はあっても不可能ではないが、インド文芸に至っては、日本における研究がほとんど成立していないくらいであって、我々専門外の者がこ

れに口を挟むということは、ほとんど不可能の状態である。それで中国文芸との比較は、幾分準備にとりかかることができ、例えば「万葉」「古今」と唐詩との比較、平安朝物語と晉唐小説との比較の如きは、少しは手にかけても見たのであるが、それも組織を立てるまでには進んでおらず、殊にインド文芸との比較に至っては、全く踏み入ることができない。学界の現状では、何人と雖も中国・インドの作品を精密に日本の作品と比較し得る人はあるまいと思う。それは西洋の作品との比較よりもむしろ困難なくらいである。その点では造型美術の世界は、言語という障壁がないために、まだしも比較研究が容易である。文芸に至っては、言語の克服が困難である上に、長時間を要する性質のものであるから、非常な難事に属するといわなければならない。

それで私がここに試みた、日本文芸の特質についての考察は、準備的作業の甚だ薄弱な、早急な結論だけを並べたようなものであり、日本文芸と比較されるべきは、外国文芸についての考察は、単に通用の常識から漠然と得来した観念を基礎としたものに過ぎない。ただしかしながら、一本の草でも、深くそれを凝視し、その本性を洞察すれば、おのずからその特性に触れ得ることもあると思う。日本文芸の或るものについては、専門の立場から幾らか深く久しい省察を施して来たつもりであるから、或る程度まではその性命を捉え得た点もあるであらうかと、ひそかに考えないわけでもないのである。それ故、本稿は日本文芸の様式的特徴についての仮定的考察であり、今後完全な比較研究の結果、どこまでこの想定が正しいかを証明されるべき筈のものであると考えて貰えばよいのである。